

週刊 武四郎

●毎月第二週は、
松浦武四郎と北海道に
ついてご紹介します

第1号

2018年(平成30年)4月11日(水)
発行・松阪市

監修・松浦武四郎記念館

武四郎と龍馬と開拓と

武四郎さんが、あの坂本龍馬と実際に会ったかどうかは定かではありませんが、『雄魂姓名録』という龍馬関係資料の中に、蝦夷地の旅の「用意ノ道具」について武四郎さんに聞いた内容がメモとして残されています。これは他所でも見かける文書なので、幕末の頃、蝦夷地に関心のあった人々の間では広く流布していたのかもしれませんが。それほど当時の志士たちにとって「蝦夷地開拓」というのは刺激的な言葉でした。龍馬の弟分ともいえる北添侂磨は、しばしば実際に武四郎さんを訪ねて蝦夷地のことを聞いています。明治になって龍馬の妻も、「北海道ですが、海援隊で開拓すると云って居りました。私も行く積りで、北海道の言葉を毎日稽古して居りました」(『千里駒後日

譚』と語り残していますから相当本気だったようです。そして、彼らにとって武四郎さんは良きアドバイザーだったのでしよう。龍馬たちは江戸や京都に溢れる不逞浪士を船で蝦夷地に運び、開拓と諸外国との貿易を考えていました。それは武四郎さんたちの世代にはなかった開明的な考え方でした。当時武四郎さんは五十歳前、人生五十年の時代、そろそろ老境に差し掛かっていた彼は、これからの開拓には龍馬たちのような若い世代の新しい発想と行動力が必要だと感じていたのかもしれません。

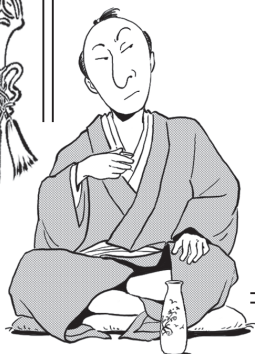


彼らの夢は潰れます。しかし明治になって龍馬の甥たちが「北光社」を起して一族を引き連れ北見に入植、現在、北海道を代表するお菓子の六花亭の美しい花の包装紙……あの花々を描いた画家の坂本直行氏はそのご子孫であるのです。龍馬が友に伝えた、「二人で

なりともやり付申べくと存居申候」という強い蝦夷地への思いは世代を超えて受け継がれ、武四郎さんの蒔いた種は壮大な大地を背景に、こうした人々の営みによって今に伝えられているようにも思われます。今年(生誕200年)を迎える松浦武四郎の知られざるエピソードをこれから1年間にわたって、いろいろな面からご紹介してゆきます。

松浦武四郎 (1818～1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として「北海道」のもととなる「北加伊道」を含む6案を政府に提案したことから「北海道の名付け親」と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

